

# あるじでえ

No. 88

世田谷区教育委員会 民家園係  
〒157 世田谷区喜多見5-27-14

◎次大夫堀公園民家園  
☎03(3417)8492

◎岡本公園民家園  
☎03(3709)6959

平成9年3月1日 発行

## 建築儀礼 ③ 上棟式

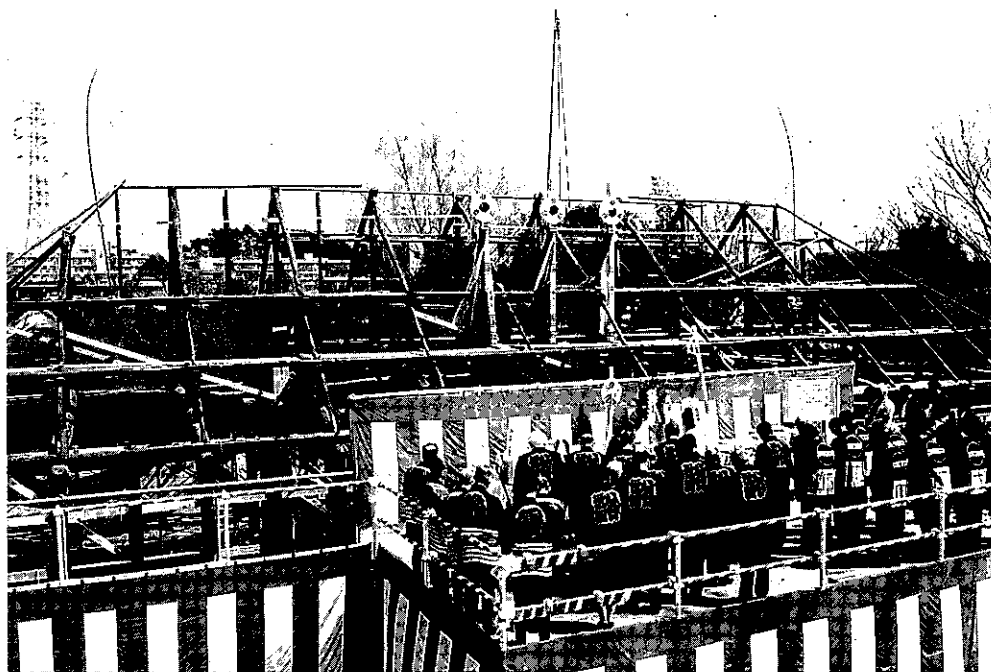


写真1 旧安藤家住宅主屋・上棟式 [平成8年3月24日 次大夫堀公園民家園にて]

上棟式とは、棟木むなぎを上げる際に行われる儀式で、大地をつかさどる神に守護を感謝し、家屋の棟をつかさどる神々に事の成就を願う、建築儀礼の中では最も主要な祭事です。この時の祭神は、家屋の守護神である屋船久久能知命やふねくくのちのみことと屋船豊受姫命やふねとようけひめのみこと、工匠の神である手置帆負命たおきほおいのみことと彦狭知命ひこさしりのみこと、それにその土地の氏神である産土大神になります。

世田谷辺りでは一般に“建前”と呼ばれています。本来この建前とは、柱はしらや梁はり、

小屋材などの主要な構造部材を組み立てることで、棟木を上げるまでの作業を指します。やはり上棟式じょうとうしきや上棟祭じょうとうさい、あるいは棟上式むねあげしきと呼ぶのが正式な祭事の名称のようです。それがいつのころからか、建前が終了するという意味合いから、上棟式のことを建前と称すようになったのでしょう。

この儀式では、屋上と屋下むろろぎ、あるいは屋下むろろぎのみに祭場が設けられ、神籬ひもろぎが立てられます。神前しんぜんには、神饌しんせん（米・酒・餅・魚・蔬菜・塩・水など）や、大工仕事で使われ

た主要な三道具(墨刺・曲尺・鉦)、そして棟木を打ち納めるための木槌などが供えられ、また、屋根には幣串と二対の破魔弓・破魔矢が上げられました。

幣串は、施主やその親戚が棟上げを祝って立てるもので、施主の徳を表すものでした。ですから、その家の格式や財力によって立てられる本数も異なったわけです。

一般の農家の普請では、幣串が1本上げれば良い方でしたが、今回は村名主を勤めた旧安藤家住宅の復元工事のため、3本の幣串を立てることとしました。

また、二対の破魔弓と破魔矢は、家の表鬼門(北東)と裏鬼門(南西)の方角へ向けて、破魔矢を放つように飾るもので、家の邪気を払い、魔除けの意味が込められていたようです。表鬼門に向ける破魔矢は、陽の矢あるいは天の矢と称して天に向けられ、裏鬼門に向ける破魔矢は、陰の矢あるいは地の矢と称して地に向けられました。この外、世田谷辺りでは、火伏せのまじないとして、水木の枝を棟木に縛り付け、火事によって家が燃えてしまわないようにとの願いが込められていたようです。

さて、儀式の中心は、工匠(大工)が木槌で棟木を打ち固める“槌打ちの儀”になります。まず、槌打ち役が司祭より木槌を受け取って棟に上がります。続いて、棟梁が振幣を受け取って祭壇の中央へ進み、棟(屋上)の神座に向かって一礼します。そして、鷹職の木遣によって棟木を屋上まで吊り上げて棟に据え付けられたところで、棟梁は振幣を振って「千歳棟」「万歳棟」「永々棟」の発声をし、槌打ち役はそれぞれに「オー」と答えて、最後に木槌で3回棟木を叩いて打ち納めるのです【写真2】。

こうして槌打ちの儀が終了すると、今度は建物の四隅と中央が清められます。その順序は、建物の北東(表鬼門)の方角から

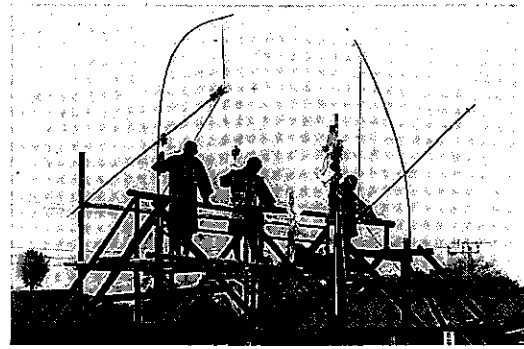


写真2 槌打ちの儀

右回りに、南東⇒南西(裏鬼門)⇒北西へと廻り、最後に建物の中央に戻って清められますが、この際四方餅も一緒にそれぞれの箇所へ供えられました。

続いて散銭・散餅の儀として、棟上げが無事に迎えられたことを、皆と共に祝い、福を分かち合うという意味で、餅撒きが行われました【図1】。地方によっては、この餅が木の葉を表すものだとし、餅が撒かれることで普請に使われた木の精霊がなくなったとするところもあるようです。

こうしたかつての農家普請の際に行われていた棟上げの祭事は、寺社などで行われる正式な上棟式に比べるとかなり簡略化されたものですが、現在一般の住宅で見られる上棟式の祭事はさらに簡略化されていて、建物の四隅をお清めする程度で済ませてしまっている場合が多いようです。

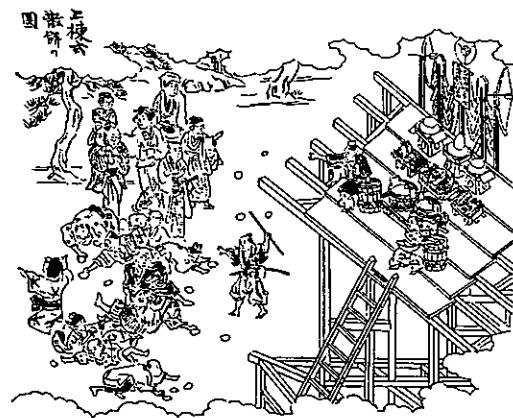


図1 上棟式・散餅の儀

### 上棟式にまつわる伝説

古い言い伝えによると、上棟式は元来、女の人を供養するために始まったものといわれています。

その昔、上棟式を明日に控えたある高名な棟梁が、玄関の柱を短く切り過ぎてしまい、途方に暮れていたそうです。誇り高き棟梁は、その柱の足りなさを恥じて、自殺しようとしてまで思い詰めていました。

その様子を物陰から見ていた棟梁の女房は、それはそれは献身的でとても頭の良い女房だったそうで、混乱する棟梁にとりあえずお酒を飲ませて寝かしつけ、自らは一晩寝ずに解決策を講じたのです。そして、思案に思案を重ねた末にようやく考えついたのが、斗を使った組み物でした。

翌朝になって女房は、一升斗・五合斗・一合斗の3つの斗を棟梁に黙って差し出すと、それを見た棟梁は「そうか!」とうなずいて、柱の足りない分をこれらの斗で見事に補って納めたのです。これが斗組の始まりだったそうです【図2】。そのおかげで、棟梁は上棟式を無事に終えることができたのです。

ところが、その時に棟梁は、夫婦というものとは所詮他人同士の集まりなので、いついかなる時に別れることとなって、このときの恥が世間に知れ渡ることとなるかもしれぬと思い込み、棟梁としての自尊心から、口封じのために女房を殺してしまった

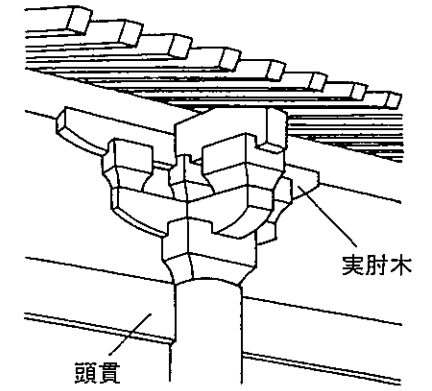


図2 斗組(出三斗)

のだそうです(頭の良い女房だったので、自ら進んで自殺したともいわれます)。

しかし、後になってから、このことをとても後悔した棟梁は、自分のために尽くしてくれた女房を永劫末代まで祀り供養しようということで、以後の棟上げの際には必ず、女の七つ道具(紅・白粉・鏡・くし・かもじ・こうがい・針)【写真3】を棟に飾るようになったのが、この儀式の始まりになったということです。

棟梁たちによって語り継がれてきたこの切ない建前(上棟式)の伝説は、家を建てること、つまり建前を仕事とした男のすさまじいばかりの執念と、その男の生きざまに本音で殉じた女の物語として、“タテマエとホンネ”の語源になったわけです。

そして今でも、上棟式の際に建てられる幣串に女の七つ道具が飾られるのは、この女房を慰めているからだということです。

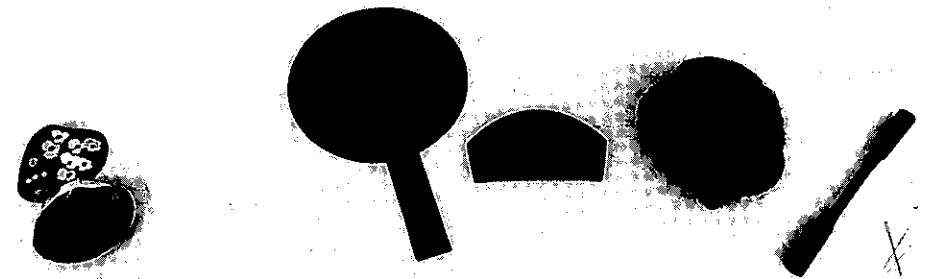
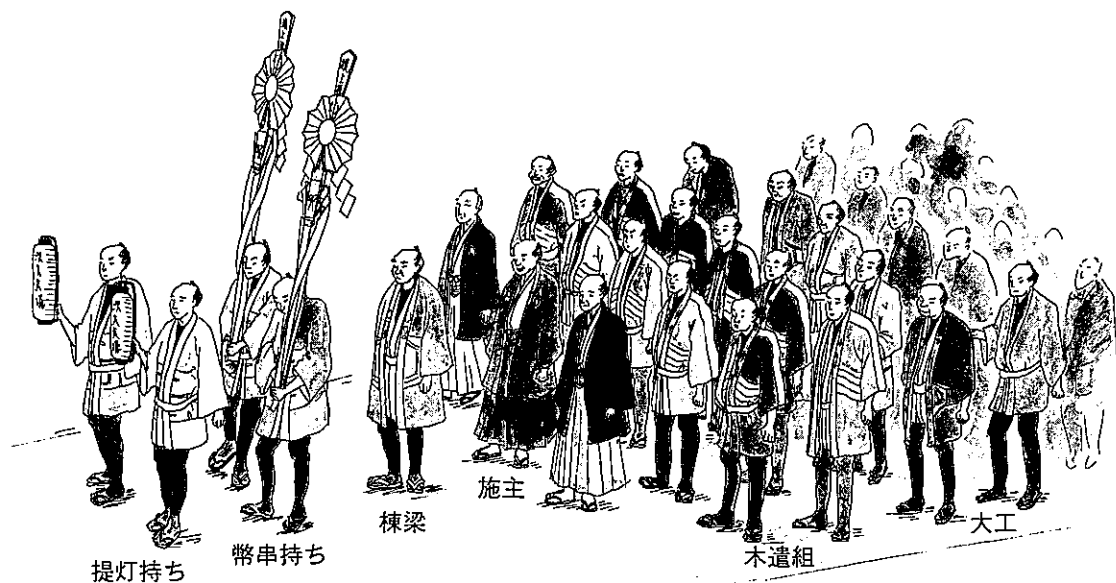


写真3 女の七つ道具(左から紅・白粉・鏡・くし・かもじ・こうがい・針)

\* 1... 図1は日用百科全書『造家と築庭』より抜粋したものです。

# 建築儀礼 ④ 棟 梁 送 り



今日ではほとんど行われなくなりましたが、かつての世田谷辺りでは上棟式の祝いが終わると、“棟梁送り”と呼ばれる建築儀礼が行われていました。これは、鳶職人たちが建前で棟に上げられた幣串や破魔弓を捧げ持って、施主やその関係者とともに棟梁（大工の親方）を自宅まで送って行くという儀式です。

この儀式は、おそらく棟上げを無事に終えた棟梁の労をねぎらって行われるようになったものと思われ、神前に供えられた神饌（米・酒・餅・魚・蔬菜・塩・水）なども荷車に載せて、一緒に棟梁の家へ運ばれました。そして、その道中では、鳶頭の音頭によって鳶職人たちによる“木遣唄”が唄われました。

この時の隊列は、先頭から提灯持ち—幣串持ち—棟梁—施主—鳶頭と木遣組—大

工—その他の工事関係者—親戚一同と続き、長い列ができました。

棟梁の家の門前へ着くと、鳶頭によって十縮が行われ、そこで“棟梁送り”が終了しました。また、このときに運ばれた幣串や破魔弓は、しばらくの間、棟梁の家の門前に飾られていたそうです。

但し、こうした建築儀礼も、江戸時代の農村における民家普請では、ほとんど行われていなかったようで、世田谷辺りでも明治時代以降に始まったもののようです。

尚、今回旧安藤家住宅主屋の移築復元工事で行われた上棟式及び棟梁送りの実演は、同工事で木工事を担当している二村工務店社長・二村次郎氏、並びに棟梁の村松研治氏、五番組の副組頭を務める清水組の鳶頭・清水光蔵氏にご協力を頂いたものです。

区文化財資料調査員 高橋 誠